

子宮頸がん予防ワクチンの接種説明書

下記の説明をご覧のうえ、接種を受けてください

1 病気について（子宮頸がんと発がん性ヒトパピローマウイルス（HPV））

- ①子宮頸がんは、子宮頸部（子宮の入り口）にできるがんで、20～30代で急増し、日本では年間およそ15,000人の女性が発症しています。子宮頸がんは、初期の段階では自覚症状がほとんどないため、しばしば発見が遅れてしまいます。がんが進行すると、不正出血や性交時の出血などがみられます。
- ②子宮頸がんのほとんどは、ヒトパピローマウイルス（HPV）というウイルスの感染が原因で引き起こされる病気です。
- ③HPVは感染しても多くの場合、感染は一時的で、ウイルスは自然に排除されますが、感染した状態が長い間続くと、子宮頸がんを発症することがあります。
- ④HPVは子宮頸がんを始め、肛門がん、膣がんなどの尖圭コンジローマ等多くの病気に関わっています。
- ⑤HPVは特別な人だけが感染するのではなく、多くの女性が一生のうちに一度は感染するごくありふれたウイルスです。
- ⑥子宮頸がんの原因となるHPVは少なくとも15種類ほどのタイプがあり、その中でもHPV16型、18型は子宮頸がんから多くみつかるといわれるタイプです。日本人の子宮頸がん患者の約50%～70%からこの2種類の発がん性HPVがみつかっています。

2 予防接種について（発がん性HPVに感染する前のワクチン接種が効果的です。）

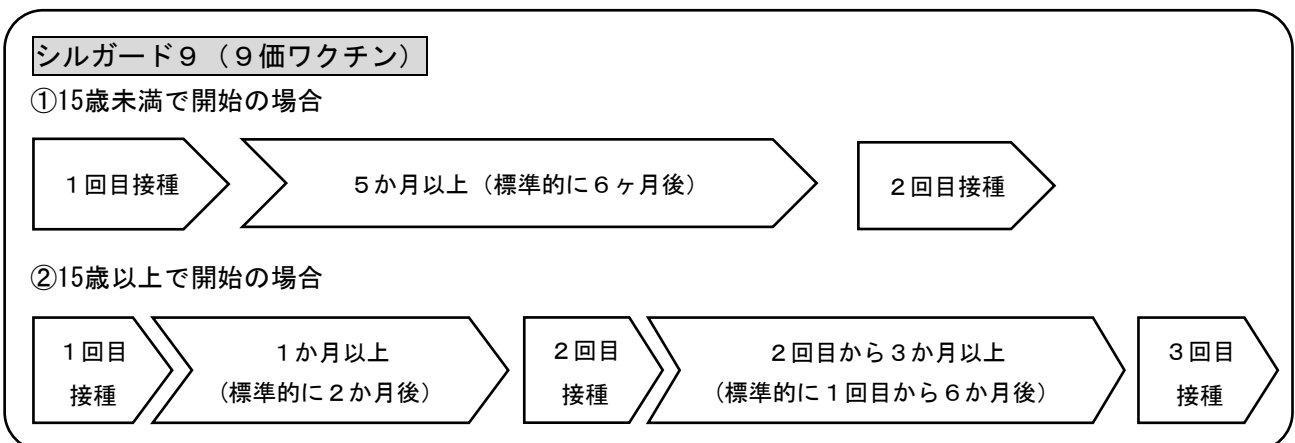
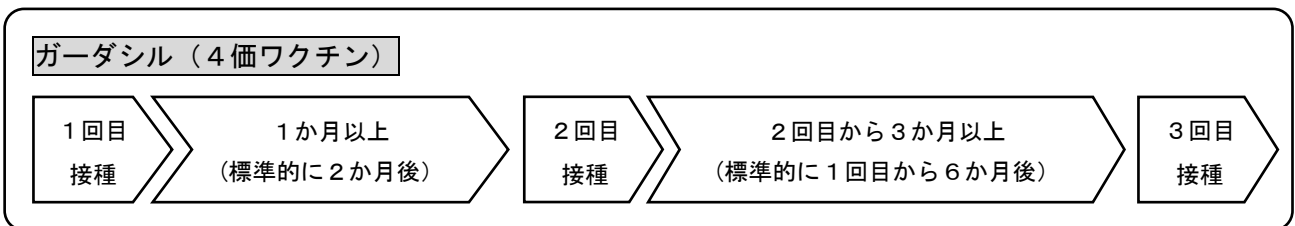
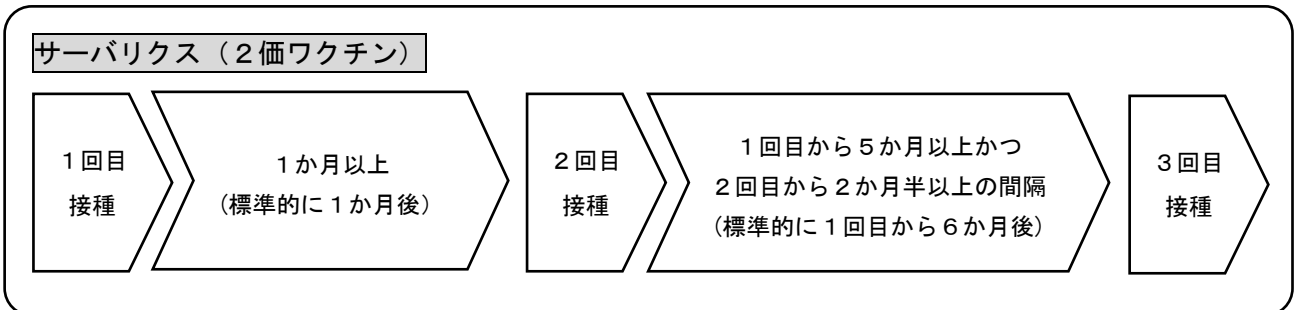
- ①子宮頸がんの発症は20代以降に多いですが、発がん性HPVの感染から発症まで数年から十数年かかります。
- ②発がん性HPVに感染する可能性が低い10代前半に子宮頸がん予防ワクチンを接種することで、子宮頸がんの発症をより効果的に予防できます。
- ③現在接種できるワクチンは、サーバリックスとガーダシルの2種類があります。いずれも、子宮頸がんの原因とされるHPVのうち、16型と18型の感染を予防することができます。また、ガーダシルは、尖圭コンジローマ（外陰部等にできるいぼ）などの発症に関係するHPV6型、11型の感染も予防できます。
- ④子宮頸がん予防ワクチンは、腕の筋肉に接種します。筋肉への接種は一般的に痛みが強い場合があります。
- ⑤子宮頸がんワクチンは現在3種類あり、接種間隔や接種回数がそれぞれ異なります。詳しくは次のページを参照願います。
- ⑥ワクチン接種した後も、全ての発がん性HPVによる病変が防げるわけではありません。早期発見のために子宮頸がん検診を受診しましょう。

3 対象者・接種スケジュール

カテゴリ	対象者
通常定期接種	小学校6年生～高校1年生の女性（H18.4.2～H23.4.1生まれ） 町では、標準的な接種期間である13歳になる年度（中学校1年生）の方へ接種勧奨通知をお出ししています。
キャッチアップ接種（※）	平成9年4月2日～平成19年4月1日生まれの女性

※HPVワクチンの積極的な勧奨の差し控えにより接種機会を逃した方に対して公平な接種機会を確保する観点から、積極的な勧奨を差し控えている間に定期接種対象であった平成9年度生まれから平成18年度生まれまでの女子をキャッチアップ接種の対象として定期接種として接種していただけます。期間は令和4年4月1日から令和7年3月31日までの3年間です。

【接種スケジュール】



※取り扱うワクチンは医療機関によって異なります。詳しくは接種する医療機関へお問い合わせください。

【注意】 2価復は4価で接種を開始した場合、残りの回数分を9価へ切り替えて接種することは可能ですが、9価から2価又は4価へ切り替えることはできません。また、2価から9価へ切り替える場合の接種間隔は9価の接種間隔が適用されます。

4 接種に当たっての注意事項

予防接種は体調の良い日に行うことが原則です。お子様の健康状態が良好でない場合には、かかりつけ医等にご相談のうえ接種の判断をお願いします。

なお、以下の場合は接種を受けることができませんのでご注意ください。

- ①明らかに発熱している方（通常は37.5℃を超える場合）
- ②重い急性疾患にかかっている方。
- ③ワクチンの成分（詳しくは医師にお尋ねください）によって過敏症（通常接種後30分以内に出現する呼吸困難や全身性のじんましんなどを伴う重いアレルギー反応を含む）を起こしたことがある方。
- ④その他、かかりつけの医師に予防接種を受けないほうがよいと言われた方。

5 次の方は接種前に医師にご相談ください

- ①血小板が少ない方や出血しやすい方。
- ②心臓血管系疾患、腎臓疾患、肝臓疾患、血液疾患、発育障害などの基礎疾患のある方。
- ③過去に予防接種で接種後2日以内に発熱のみられた方。
- ④過去にけいれん（ひきつけ）をおこしたことがある方。
- ⑤過去に免疫状態の異常を指摘されたことのある方、もしくは近親者に先天性免疫不全の方がいる方。
- ⑥妊婦あるいは妊娠している可能性のある方（3回の接種期間中を含む）。
- ⑦現在、授乳中の方。

6 予防接種後の副反応について

ワクチンを接種した後に、注射した部分が腫れたり痛むことがあります。このような痛みや腫れは体内でウイルス感染に対して防御する仕組みが働くためにおこりますが、通常は数日程度で治ります。接種後1週間は症状に注意し、強い痛みがある場合や痛みが長く続いている場合など、気になる症状があるときは、接種を受けた医療機関やかかりつけの医療機関へご相談の上、受診してください。

その他、主な副反応としては、痛み、赤み、腫れ、胃腸症状、頭痛、筋肉痛、注射部位のしこり、発熱、疲労感等があります。また、失神・血管迷走神経発作（過度の緊張に伴う動悸、気を失う、息切れなど）を起こすことがあります。

重い副反応としては、まれに、アナフィラキシー様症状（血管浮腫、じんましん、呼吸困難など）、ギランバレー症候群、血小板減少性紫斑病（紫斑、鼻出血、口腔粘膜の出血等）、急性散在性脳脊髄炎が現れることがあります。

7 予防接種救済制度について

子宮頸がん予防ワクチン接種は、予防接種法に基づく予防接種です。万一、健康被害が生じた場合は、「予防接種法」による救済となります

8 がん検診を定期的に受けることで、ほぼ100%の予防ができます

ワクチン接種をした後も、全ての発がん性HPVによる病変が防げるわけではないので、早期発見をするために子宮頸がん検診の受診が必要です。

多くの自治体が実施する子宮頸がん検診は、20歳以上を対象として2年に1回の間隔で受診できます。なお、10代の方は公的な検診制度はありません。

その他、気になることがありましたら、すぐにワクチンの接種を受けた医療機関・町健康福祉課にご相談ください。